

木守りの柿



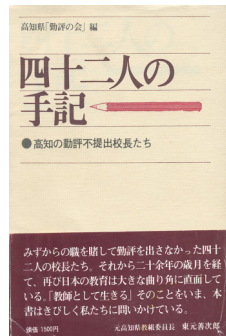
横島有幸を偲んで

はじめに

私が敬愛してやまなかった岳父・横島有幸の三回忌を迎えることになった。戦争で最愛の甥を失った彼はその最後の年（二〇〇二年）、終戦記念日を迎えることを拒否したかのように前日にあの世へ旅立ってしまった。それほどにあの戦争を憎んでいたのだという想いがしてならない。

私達の世代は親達の世代の大きな犠牲のお陰で、戦争に行く必要のない平和な日本に生きることができた。その私達の親達が「教え子を再び戦場に送るな」と再び壮絶な闘いをしなければならなかったことは私達の子供達や孫達はもう知らない。そして為政者達の巧みな策略によって作られた時代の波に呑み込まれようとしている。「木守りの柿の有やんと房ちゃん」の孫達・曾孫達にもそれを知って欲しいと思う。平和憲法こそ日本が一番大切な「世界遺産」なのだということを。

木守りの柿



よこばたけ ありゆき
横畠 有幸 元高岡郡能津中学校長

略歴

生年月日 ● 大正二年十月六日
出生地 ● 高知県高岡郡佐川町黒原
最終卒業学校 ● 高知県立農業補習学校教員養成所

悲しみの報せ

一九四五年八月十五日敗戦。うちひしがれたうつろな日々が続く夏であった。

数百万のかけがえのない尊い命をうばつての非道極まるこの戦い。多くの知人・友人、わけでも教え子達の若い命が大陸の果てに南の洋上に消えた。又、日本中のあちこちで戦災のため一瞬のうちに沢山の方の命も露と消えた。

私は音楽の主任をしていた関係上、戦時中軍国教育のさなか、毎朝、朝礼台の上に加って

海ゆかば みずくかばね

山ゆかば 草むすかばね

大君のへにこそ 死なめ

かえりみはせじ

の歌を力強く指揮棒をふって、子ども達に声高らかに歌わせたのだった。その文句の通り、多くの方の命が、ああ、私の甥も又、南太平洋のもくずとなつてしまったのだ。

甥というのは私の兄の長男のことである。兄は警官となり早くから田舎の家を出て、次男である私が両親と共に佐川の黒岩に住んでいた。この甥は田舎に住む祖父母や私を慕い、又田舎ぐらしを好んで小さい頃から土曜・

日曜には必ず両親のもとを離れ一人で田舎に帰り、夏休みなど休みの終る日まで黒岩で私共と一緒に過ごした。叔父と甥でも私とは年齢もあまり離れず、私も少年時代からこの甥とはまるで兄弟のようにして育った。

私の亡き母がいつも口ぐせのように

「俊夫（甥）は『黒岩へいぬると、うんとおいしいさかながある』

とって、塩サバを喜んでいろいろのそばで食べていた」と語っていた。

冬はこぼてをかけに一緒に山を歩き、春はまだ浅い頃めじろをおとしにこぼんをさげて出かけたものだ。夏は毎日川へ魚とりや水泳に行ったり、せみとりに興じたものだ。家の裏を流れる谷川の水車の音を聞きながらうなぎをつったり、えびをすくったり、日の暮れるのも忘れ、夕やみせまる頃かじかの声にあわてて家にもどった。母の縫ってくれたおそろいのカスリの着物を着てはたる狩りに行つた夏の夜の思い出。

私は七十を過ぎたこの年になつてもなぜかホタルが好きで、最近めつきり少なくなつたホタルを探しに田んぼの畔道を歩く。甥との思い出が断ち

切れないのだろうか。

残暑きびしい九月十九日、敗戦の日から少しずつ落ち着きをとりもどし何とか立ちなおらなければと、生きる道を考えはじめていた頃である。もう今日まで何の報せもないのだから、俊夫（甥）の飛行機も落ちずに無事でいたのだらうと、にこにこ元気で帰ってくる姿をみんなで首を長くして待っていた。

その矢先、突如として一通の電報がもたらされた。それには

「三月十五日 本土南方洋上で戦死」

と記されていた。

私はとるものもとりのあえず、高知の兄の官舎まで急行した。床の間には甥の遺影と白木の箱が安置されていた。白木の箱の中にはうすつぺらな名前を書いた一枚の板切れが入っていただけで遺品の一つ入っていなかった。何という残酷なことであろうか。一家をあげて今日まで無事帰還を祈り、

待ちこがれていたのに……。しかも敗戦の半年以前の三月に既に戦死していたとは。

彼は、付属小から海南中学に入った。両親は彼を教師にしたいと願っていた。心優しくいつも柔和な笑みをたたえ、こつけいなことを言ってはみんなを笑わせたりした。絵が上手で体育が好き、特に鉄棒などとてもうまくいった機敏な少年であった。海南中学（当時の校長は後の甲藤教育委員長）に学び、軍国教育をたたきこまれる中で、少年の胸の中は次第に大君のために一身を捧げこの日本を護りたいと、あつい熱情に燃えるようになった。

両親の意志に反して甲種飛行予科練習生を志願して海軍に入隊した。入隊して間もなく、海軍の制帽と軍服とを身につけた凛々^りしい写真を送って来た。その写真が遺影になろうとは。

戦死する一年程前、私は当時宮崎航空隊にいた彼に面会に行った。私も戦闘帽と国防服に身を固めていた。物資も乏しくなっていた。彼の下宿で

一夜を共にし語りあかした。

私は翌朝、彼の愛機一式陸攻の離着陸訓練をはるかに眺めながら、心を残して郷里に帰って来た。やがて戦闘に加わるであろう彼の武運を祈りつつ。

しかし、その祈りも空しく、彼は南方洋上で二十三歳を最期として華と散った。雄々しく飛びたつた彼の心中を思いめぐらし、華と散った最期の姿を思いうかべ、八月十五日の敗戦のショックにも泣かなかった私が、この時ばかりは一人で号泣した。涙は後から後から溢れてなかなか止ることを知らなかった。

今生きていれば孫にかこまれ、幸せな老後を過ごしているであろうに。又、私のよき話相手でもあったであろうに。今宵も裏のせせらぎで澄んだ声で「コロコロ……」となくかじかの声が聞こえてくる。このかわいい美しい音色を耳にするたびに、六十年昔のことがなつかしくよみがえって来る。

戦後十三年、一九五八年、教育界に勤評きんぴょうのあらしが吹きあれた。県下の教師は一致して

「教え子を再び戦場に送るな」

をスローガンに連日闘いの明けくれであつた。

私は県下の校長数百名と共に勤評不提出を誓った。固く誓った。その誓いの原点は教え子の戦死と、二十三才の若さで散って逝ったこの甥の戦死であつた。

たちねの母に別れも語らずに

俊夫は空に 華と散りたり

みなみ
南の 空に向かいてますらおは

ただひとすじに 征きに逝く

一九六〇年、昭和三十五年八月末日、勤評不提出を理由に降格・不当配

転された。苦しい日々の連続であつた。この苦難の夜、ふと、うかんで来るのは悲しい報せを受けた日のことと幼少を共にした甥との思い出。海中のもくずとなつた彼のことであつた。

今、甥は彼の愛した故郷・黒岩の山の墓地に、先祖や祖父母両親と共に静かに眠っている。「海軍兵総長 天倫院岳智雲居士」として。天を翔け、雲を友とした彼にふさわしい戒名である。

墓地には今年も又夏草がおいしげっている。東京から墓参に帰って来た私は、甥のそばにいく日もさして遠くはないとしみじみ過ぎこし歳月を思い出しながら、墓のこけを洗い夏草をむしった。

俊夫よ、安らかに。

合掌。

晩夏の訪問者

夏休みもあと数日を残すだけとなった。残暑はきびしくその日も三十度を越す暑い日であつた。その頃、私共家族は勤評の闘いで黒岩では村八分

うろう」

「公用でこんなことをしよつたら大ごとになるぜよ」

「折角のお客様を追い返すのも失礼じゃき、お話を聞かせてもらおうか」
二人はどつかと坐り込んだ。彼はぶるぶるふるえながら後ずさりに出ようとした。

「逃げることはないろうがよ」

というのを背中であきながら靴を履きかねてほうほうのていで逃げ帰った。
教え子の立場として心情に訴えてのゆさぶりであった。おまけにいいいアメを持って。はじめから首を覚悟でどんなことがあっても教師の良心だけは売るまいぞと思っていたので別に動揺することもなかった。唯県教組の方が暑い中をさっさと電話一本でかけつけて下さった対応ぶりに頭が下がり心強さを感じたものだ。つた。

私は狩猟が好きで二十年近くポインターを連れて山を歩いていた。勤評

で首になったらこのポインターに助けてもらって車力を引いて土運びの仕事でもしようと考えていた。丁度その頃前里は戦後ほとんど家が建ち始めて田んぼが次々と住宅地にかわつていた。今のようにダンプやショベルカーもなく、山から赤土を車につんで宅地造成地までひっぱる労働者が家の近くでも多く見られた。

よし、おれもあれならできる。愛犬と共にひっぱろうと考えていたものだ。突然の訪問者の甘い言葉にもせられることもなく、割とおおらかに過ごしていた。人間一たん腹がすわれば少々のことにはへこたれないものである。唯田舎に残した一人住いの老母のことだけは気がかりであった。

ひたすら真つとうに生きたい。……どんな弾圧にも屈しないぞ。とそれだけは心に固く誓っていた。

もともと私は闘士でもない。目立つこともあまり好まない質である。口下手でむしろ消極的。静かに音楽を聞いたりピアノを弾いたり盆栽をいじったり草花を育てることが好き。銃を肩に愛犬を連れて一人で山を歩くこと

の楽しさは格別。狩猟仲間とわいわい一緒に出かけることはあまり好きではなかった。山峡の美しい紅葉を愛で、深い峡谷でジョロウ・ホトトギスの可憐さに心うばわれ、しばらく足を止める。奥山の静寂の中で澄んだ小鳥のさえずりに心を洗われ、自然の奏でる音楽に我を忘れることもしばしば。

「あの可愛い小鳥に銃が向けられるか」

とつぶやきながら歩き、小鳥やハトが目の前に来て一度もたまを放ったことはなかった。もっぱらキジを本命としたけれど、いつも犬に追わずだけ。たまたま銃を打ちかけて飛んでいくキジの後姿を見ながら

「おお、当らいでよかったぜや」

と胸をなぜおろす下手くそで珍妙な山の猟師であった。

勤評でもあれこれ迷うことなく山道を歩くようにして歩んでいた。

今日の訪問者のしつぺーがえしは目に見えていた。きつと何倍にもなっ

ておかえしが来るだろうと思っていた。予想通り、夏休み明けには能津中で降格処分。処分の身柄を池川の安居小へ。次の異動では幡多の中村小へ流された。窪川の影野小、大野見小へと転々と僻地から僻地へとふりまわしてくれた。

S主事は私の若き頃の教え子で頭のよい真面目な子どもであった。県境に近い山の学校であった。その後彼は教師となり、勤評闘争の頃には権力におもねり、立身出世のため教育行政の反動化に努め、教師の良心をふみにじった。学テ・道徳教育の闘いに次々と彼は手柄を立て、思い通り年若くして大校の校長に納まったが、校長に出世して日も浅く現職のままでこの世を去った。

S主事個人をうらむ気持などさらさらない。ゆがめられた教育と反民主的な行政の中で彼も被害者だったかも知れない。あの世で彼も自分の生き様を反省しつつ成仏していることだろう。

心から冥福を祈りたい。一人の教え子よ。安らかに。

木守りの柿

首だけはやつとつながったまま降格処分の発表。新聞にもテレビにも見
ばえのしない私の顔写真もあたかも犯人のような扱いでのついていた。黒岩
地区の人や親せきなどの憎しみを帯びた冷たいさげすみの目が一層陰険に
なつて来た。そんな時、県下の沢山の職場・多くの先輩・仲間・教え子達、
そして全然知らない方からも心あたたまる激励の電話や手紙・寄せ書きな
どをいただいた。一つ一つのお言葉が身にしみてうれしく感激した。体中
に勇気が湧いてこれからの苦難にも耐えていこうと決意を新たにした。

真実は必ず勝ちます。

権力支配をはね返す明るい職場と学校で、子ども達は明るく育つて
いる。歴史は私達の正しさを証明しています。最後に笑うものにな
りましょう。

良心の灯は消せない。(今は亡き谷さよ子さんの赤字で書いた寄せ書き)
など、力強く身にしみるような数々のお言葉。有難い限りであった。激励
のお言葉を頂いた沢山の方々へここで改めて心からの感謝の気持ちを捧げ
たい。

露にしめりて

夜を守る業のつとめも

果つる朝は近きか

同じ降格処分を受けた林恵氏から寄せられたこの歌も今だに忘れることは
できない。おだやかでもの静かな中に凜とした筋金の入った彼。信仰の道
から身につけた愛と人間平等の精神。この立場に立って勤評に反対。すば
らしい教育実践をつみあげた彼。彼も又山から山へと僻地教師として恵ま
れない子ども達の教育や地域での人々との交流に力を注いだのである。私
のなつかしい心の友である。現在体をこわし療養中とか。東京に住むよう
になつて久しく会うこともなく、気にかかりながら御無沙汰している。ど

うか一日も早く快方に向かわれるよう心から念じている。

『木守りの柿となった有やん。一緒に闘っていたのに、私は最後までがんばることができなかった。すまないと思っている。けれどこれからも私なりに教師の良心を守りたいと思っている。これからも冷たい風がきびしく吹きつけることだろうけれど、体に充分気をつけて、がんばって下さい』と一通の葉書。岩村先輩からの人間味あふるお言葉も心に深く残り、木守りの柿が何とも心にしみて忘れがたい。二十数年昔の事が次々と思い出される。退職後長い間お会いしたこともないが温厚なお人柄。何ともなつかしくご健在を祈っている。

我が家の庭の隅に四十年程前に植えた柿の木が今も毎年実をつけている。

木枯しが吹き始め朝霧がおりる頃、真っ赤にうれた実がブラブラと今にも落ちそうになって一つ二つぶら下がっている。落ちそうでなかなか落ちない。この落ちそうで落ちない柿を見る度に木守りの柿の便りが思い出される。

＊『四十二人の手記 ●高知の勤評不提出校長たち』（「高知県勤評の会」一九八五年十二月二十日初版、一九八六年二月十五日第二刷 発行）より復刻。寄稿当時、有幸・房子夫妻は東京に一時転居していた。最愛の甥の墓は現在は鎌倉にある。読みやすくするために段落と句読点を一部修正。用語や漢字は元のまま。

＊山原健二郎氏の『わが校長讃歌』（民衆社）に「木守りの柿」も再録されているが、さらに次のようなことが加えられている。



横畠夫人は地元佐川町黒岩小の先生で、勤評に反対していたため、道を通っていても「清めないかん」と父兄から塩をまかれたり、路上の小石を蹴りかけられたりした。つ

いに地元に住られなくなり高知市に借家して、六年生のお子さんと通勤を余儀なくされた。この黒岩小も襲われた。

◎昭和三十三年一月二十六日

「八時（午後）になったら何が起こったち知らんぞ！」黒岩における父母会の急先鋒であった山本広太郎氏から吐き捨てるようにいわれた。校庭には暗闇になるにつれて校下民がぞくぞくと集結していた。八時にパッと校内が停電し、同時に「かかれーっ」という声とともに職員室に向けてポンポン石が投げ込まれ、廊下や職員室の窓ガラスが激しく飛び散った。当時のS先生は机の下に難を避けたが、こぶしぐらいの石が右ひじに当り打撲傷を負った。昼間から黒岩小校下の不穏な空気を察知していた佐川町教組や地区労はオルグを数名派遣していたが、突然の襲撃に、裏山へ逃げるなどした。衣服が裂けてすり傷を受けた者もいた。

「火をつけろ」という怒声も聞こえた。共産党町議の北川哲也氏もオルグの一員として来ていた。氏は横畠夫人と共に投石の中、職員室に居残った。その氏を一〇名近い父兄が「出て行け、出た行け」と押しだそうとしていた。氏がおるとなにごん都合が悪かったのであろう。一方、校庭にはかなりの校下民が集結していた。そして「オルグが来て石を投げ、火をつけたぞーっ」と、ただならぬ扇動がなされていた。

◎予行演習か

実はこの晩、仁淀から一〇名（？）ぐらいの行動隊が来ていたし、斗賀野からも一団が来ていたという。投石されたのが校舎の裏山からだったし「オルグが来て石を投げ、火をつけたぞーっ」と校庭に集まっていた校下民を扇動していたことを考え合わせると、悪質な計画行動であったと思う。とにかく、「これは殺される」と直感したほどの恐怖の一時だった。廊下の端にあった電源ヒューズが切られていた。S先生はそれを確かめ、ヒューズを直し点灯した。

黒岩小の夜間襲撃事件は、いまだに詳しい真相が記録されていない。事件後、黒岩小の先生方が家庭訪問に行った時、父兄から「先生すみませんでした」という言葉があったという。当時、黒岩で勤評賛成の理論的リーダーだった山本惣十郎氏が後に佐川町の教育長になって、斗賀野小へ挨拶まわりに来たとき、事件当時、黒岩小に勤務していたM先生のいる全職員の前で「かつては、まことに申し訳ないことをした」と陳謝したという。

この黒岩小事件の一〇日後、仁淀村で悪名高い森事件が起きている。森事件は今は司法の手によって有罪が確定しているが、森事件のとき、黒岩小事件はそのための予行演習だったと、もっぱら噂されたものである。ついでに記録しておく、森事件では、数名の殺人を予定し、小林日教組委員長は誰が、谷脇常磐先生は誰が、石灰は、唐がらしは、と前もって綿密な任務分担がなされていたという。「木守りの柿」夫妻のご健勝を祈る次第である。

横畠有幸先生に捧ぐ弔辞

横畠有幸先生は八月一四日逝去されました。まことに悲しみに耐えません。長いご病気の末でしたが奥様から「静かにねむるが如き大往生であつた」ときかされました。大手を振って八十九才の旅路につかれたことと拝察いたします。

先生は毎朝朝礼台の上に立って「海行かばみずくかばね、山ゆかば草むすかばね」の歌を力強く指揮棒をふるって子どもたちに声高らかに歌わせたと自ら書いているように軍国主義教育の旗がしらでした。最愛の甥の俊夫さんも南太平洋のもくずとなつてしまいました。甲種飛行予科練習生として海軍に入つた二三才の若武者でしたが、白木の箱にはうすっぺらな名前を書いた一枚の板切れが入つただけでなに一つ遺品も入つていなかったのです。

たらちねの母に別れも語らずに

俊夫は空に華と散りたり

先生の悲痛な歌です。のちにはじめて戦争のみじめさを知り「教え子をふたたび戦場におくらない」との決意のもとに多くの友人と反戦平和の大道に立つ先生の眼前にたちふさがったのは残念ながら地域の反動勢力でした。

先生は村八分同様のしうちをうけ仕方なく高知市の前里に移り住んでいたのです。県のS主事が「勤評を出すと頭を振ってくださいただで結構です。そうすれば二学期から高知市内の大校の校長として転任のお約束をいたしましょう」誘惑と裏切りの巧妙なさそいでした。夫人の房子さんの気丈な連絡もあってこの教え子はほうほうのていで逃げ帰ったのですが、先生の胸の中には「ひたすら真とうに生きたい。平和と民主主義を守る礎のほんの小さな一粒の砂になるだけでよい。戦争だけはイヤだ。どんな弾圧にも屈しないぞと心に固く誓った」と決意をのべています。

しっぺかえしは目に見えていた。能津中で降格処分、池川の安居小へ、

幡多の中村小へ、窪川の影野小、大野見小へと転々と僻地から僻地へとふり廻された。「S主事は私の若き頃の教え子で次々と手柄を立て大校校長に納まったが現職のままこの世を去った。私にはいかさら彼を恨む気持ちなどさらさらない。彼も被害者だった。一人の教え子よ・仏よ安らかに」とのべる横畠校長の思いははげしい攻撃にさらされたことのある当時の教育者のいつわらざる心境であったのです。自らを「木守りの柿」とよんだ。横畠さんの同僚の林恵校長からも心のこもった激励が送られて来た。彼もまた山から山へと僻地教師として恵まれない子供たちの教育に力をそそいだクリスマスチャンであった。

「木守りの柿となった有やん、いっしょに闘っていたのに私は最後までがんばることができなくてすまないと思っている」と岩村先輩からの手紙である。

昭和三十三年十二月六日「オルグが来て石を投げ火をつけたぞー」ただならぬ扇動が黒岩小におこった。森事件の予行演習だったのだ。

事件後「先生すみませんでした」ということばが父母のあいだから出た。後に町の教育長になった人物が「かつてまことに申しわけないことをした」と陳謝したという。

本日は私は過去における事実を語らしていただいたのです。憲法にもとづいて戦争放棄をうたった憲法そのものへの攻撃が高まっていて「戦争にできる国」になろうとしているこのとき、特に八・一五の終戦記念の日を目前にして旅立った横畠先生への鎮魂の思いをこめて弔辞を捧げました。

意をつくしません、ことばが足りませんがお許しください。安らかにおやすみ下さい。ともに闘った奥様のご功績も忘れることができません。かわらぬ愛をかわりなく捧げて下さい。ご一家のみなさまの今後のおしあわせを祈ります。

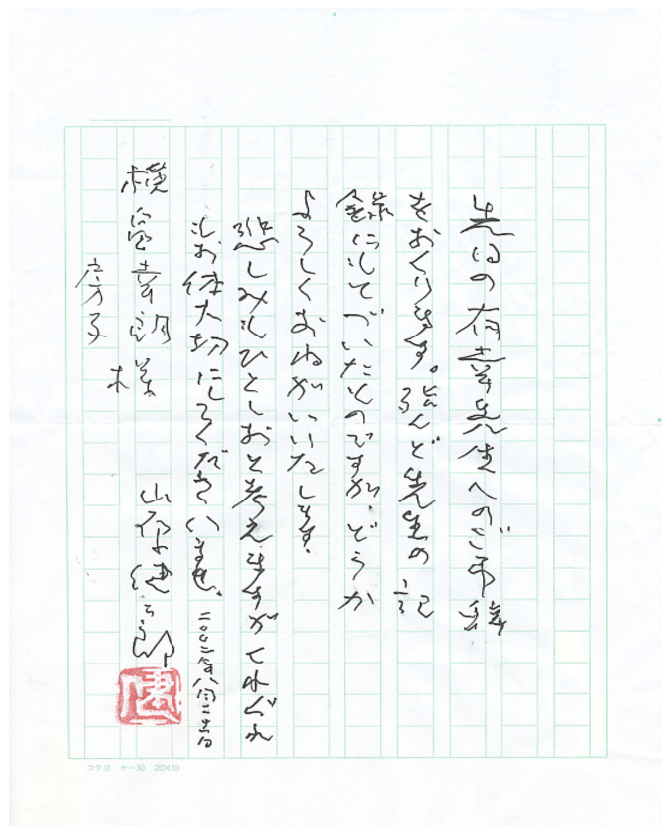
こがらしの木守りの柿は朝の陽に

朱色にもえて尊くもあり

横畠有幸先生さようなら

高知県勤評の会々長

山原健二郎



*山原さんは公選制の県教育委員・県教組副委員長だった。勤評闘争で逮捕投獄もされたが、党派を越えた県民の多くの支持を得て四国で初の共産党国会議員となった。平和を愛し民衆を愛し絵と短歌をよくした。一〇期連続で衆議院議員当選。

病の身をおしてかつての同志のために弔辞を読みに来てくださったのである。二〇〇四年三月八日、惜しくもあの世に旅立たれた。再会したかつての同志達と「**教え子を再び戦場に送るな**」とさらに声を大にされているに違いない。葬儀には幸朗・文子夫妻が出席。交通渋滞が起きたほどの党派を越えた参列者の数だったとのこと。

＊【勤評とは】（その本質がよくわかる部分を他の校長達の手記より抜粋）

・・・各界各層のごうごうたるの反対の声に耳を貸さず、このような批判の中に非を覚悟の上で、無謀な強硬突破を決意した政府自民党は、昭和三十一年六月二日、五百人の警官を国会内に導入しその護衛の下に突如討論打ち切り、採決を強行し、乱闘国会の汚名の中に成立せしめたのがこの新教委法である。しかもこの法案はわずか八・九固条を審議にかけたのみで、他の各条項には一切ふれてもいないのである。全く無茶な法律というべき

である。

勤務評定はこの法律の第四十六条に掲げられているもので、全然審議もされず一括採決となったもので、いわば乱闘国会のいまわしい罪のおとし子というべきものである。

しかしこの罪の落とし子たる勤評は、愛媛県において教師の昇級財源不足から三割の教師をを昇級ストップさせるために、教師をふり分ける手段としてはじめて之を利用しようとした。これに対して愛媛県教組は全組織を挙げてこれを阻止する闘いに起ち上がった。これが勤評闘争の発端である。

教育財政上の問題から取り上げた勤評が、意外にも教師をしめ上げる有力な決め手であることを見てとった政府文部省は、全日本の教師を統制するためには確実に勤評実施の具体的計画に着手した。勤評の嵐はかくして日本全国に大きな渦をまきおこして荒れに荒れたのである。

（岡田 巧 元伊野小学校長 の手記より）